

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

教師の学びにおける行為の中の省察に関する研究

A Study of Reflection-in-action in Teacher Learning

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

中村 駿

NAKAMURA, Shun

研究指導担当教員： 尾澤 重知 准教授

本論文は、現代における教師の専門性である教師の学び (teacher learning) のあり方に繋がる知見を得るために、教師による行為の中の省察 (reflection-in-action) の特徴を検討したものである。行為の中の省察とは、人間が環境との相互作用において予想外な状況であると認知したときに、その状況の渦中において自身の見方や行為を再構成するプロセスを意味し、不確実性や複雑性を実践の本質とする教師に求められる思考様式とされている。本論文は、全7章から構成されている。

第1章では、教師の専門性と教師教育をめぐる状況を概観した。従来は、教師を技術的熟達者 (technical expert) として捉えて、理論を実践に道具的に適用できることが優れた専門家の要件であったのに対して、現代は、教師を反省的実践家 (reflective practitioner) と捉え、実践の省察を通して教師自らが如何に学ぶことができるかが問題となる。こうした変遷を踏まえ、反省的実践家の考え方にに基づき教師の専門性について検討していく必要性を指摘し、本論文では教師の学びにおける省察に焦点を当てて研究を進めることを述べた。

第2章では先行研究レビューとして、まず、反省的実践家の提唱者であるSchönの主要な省察概念 (すなわち、行為の中の知、行為の中の省察、行為についての省察) の定義を整理した上で、教師の省察研究の動向と課題について検討した。先行研究の課題として、(1)行為についての省察に関する研究が多く、反省的実践家の鍵概念である行為の中の省察をほとんど検討していないこと、(2)教師が省察を生起させることができない事例も見られ、教師の学びを保証できていないことが示された。かかる問題に対し、Schön (1992) によれば行為の中の省察は、予想外の状況を認知した場合に生起するとされているため、本論文では授業過程における教師の認知 (授業認知) が行為の中の省察を左右する重要な要素であるという仮説を立て、研究を進めることにした。具体的には3つの授業認知の問題が鍵になると考えられた。すなわち、①授業において教師が注目する教室環境とその意味づけ、②授業認知の違いから見た行為の中の省察の特徴、③予想外な状況とその捉え方である。

次に、上記の問題に対する研究の現状を把握するために、教師の授業認知に関連する先行研究をレビューした。その結果、①の問題に対する課題として、教師が注目する教室環境について具体的に解明されていないこと、1時間の授業全体における教師の意味づけについて比較検討されていないことが示唆された。また、②や③では、授業中の教師から予想外な状況を同定し、その状況下の認知内容を調査するための十分な方法がないことが課題として挙げられた。さらに②は教師の授業認知の違いを顕在化すること、③は教師にとって予想外な状況を多く収集することが求められるため、目的に応じて調査方法を工夫する必要性が示唆された。

第3章では、本論文の目的と構成について述べた。本論文では、授業認知を手がかりにして、教師による行為の中の省察の特徴を明らかにすることを目的とし、先行研究の課題を踏まえて3つの研究を構成した。研究1では、写真スライドによって1時間の授業全体の相互作用を表現し、教師が具体的に注目する教室環境やその意味づけの特徴を比較検討した。研究2では、初任者教師に授業、熟練教師に授業観察を依頼し、両者の授業認知の違いに着目しながら、現実の授業実践における教師の行為の中の省察の特徴を検討した。研究3では、机上授業という授業シミュレーションを活用して様々な授業場面を教師に提示することによって、教師にとって予想外と認知された状況を収集し、その特徴を探った。

第4章では、授業過程において教師が注目する教室環境やその意味づけに焦点を当て、教師の授業認知の特徴を明らかにすることを目的とした (研究1)。方法として、Carter *et al.* (1988) の写真スライド法を援用し、小学校社会科1時間の授業に関する写真スライドを提示することによって小学校教師31名の授業認知を調査した。分析の結果、教職経験年数の多い教師群になるほど、(1)授業の注目箇所において人間の感情を理解する上で精度の高い情報源 (すなわち、児童の視線や表情) に注目する傾向があること、(2)過去の場面と関連付けながら状況を捉える傾向があること、(3)指導案から予測される児童の反応に基づいて状況を捉える傾向があることが明らかになった。以上のように、教師によって授業認知の特徴が異なることが示された。

第5章では、授業認知の違いに着目しながら、授業実践における行為の中の省察の特徴について明らかにすることを目的とした (研究2)。方法として、生田 (1998) のオン・ゴーイング法を用いて熟練教師が授業観察中に重要であると認知した場面を抽出し、その場面を動画で初任者教師に提示し、授業時の認知内容を想起させた。

初任者教師1名と熟練教師1名を対象として授業認知の違いに着目して分析した結果、授業者の初任者教師は、(1)自身の教授行動に没頭し、行為の中の省察が生起しうる出来事を見逃していること、(2)予想外な状況を一時点で捉えて、行為の中の省察を生起させていること、(3)予想外の状況であると認知して自身の見方や行為を問題視するものの、緊張等の理由で、その場では新たな行為を試みない場合もあることが明らかになった。このように、授業認知の特徴に応じて行為の中の省察の生起が左右されることが示された。一方、教師は予想外な状況を認知しても、新たな行為を保留する場合があることも示唆された。

第6章では、教師が予想外であると認知した状況に着目し、教師が行為の中の省察を生起させる状況の特徴について明らかにすることを目的とした(研究3)。方法として、Sakamoto(1980)の机上授業を援用し、教師で先生役と子ども役を分担し、人形劇によって授業をシミュレートさせた。実験では予想外な状況を抽出するため、机上授業の相互作用において先生役の教師が予想外な状況であると認知した場合、合図を出して授業を中断し、認知内容を報告させた。教師16名(先生役5名、子ども役11名)に調査を依頼し、分析した結果、(1)行為の中の省察のきっかけとなる状況は、対学級と対個人に関する問題に大別され、教師はいずれかの問題に対応しなければならない、あるいは、2つの問題を同時に対応しなければならないことによって自身の見方や行為を吟味するようになること、(2)そうした予想外な状況を認知する上で、授業における4つの関係(①出来事の理解と自身の行為の関係、②授業の出来事と学習活動の関係、③異なる時点の出来事の関係、④児童同士の関係)が手掛かりになることが示された。また、(2)で挙げた関係のうち、③と④は、多様なパターンが見られ、教師がどのように関係づけて状況を捉えるかに応じて行為の中の省察の生起が左右されることが示唆された。

第7章では、図1のように結果を整理した上で総合考察を行った。行為の中の省察の生起を左右する要因は、(1)注目する教室環境、(2)出来事の結びつけ、(3)子ども同士の関連づけ、の3側面の授業認知の違いであると結論づけた。また、教師の省察研究への示唆として、教師の表情認知や行為の側面から授業認知を検討する必要性、時間軸によってリフレクション概念を区別する先行研究を再検討する必要性、教師が予想外な状況を認知しても新たな行為を保留するような教師固有の省察プロセスの可能性を提案した。教師が学び続けるための実践的示唆として、精度の高い情報源に注目することとそのための教授スキルの獲得、出来事や児童同士の関係を結びつけた状況認知、という2つの観点から教師教育の方法を検討した。今後の課題として、本論文では行為の中の省察を生起させるまでのプロセスに限定して検討したが、生起させた後に教師がどのように新たな見方や行為を形成していくのかについても解明していく必要があることを述べた。

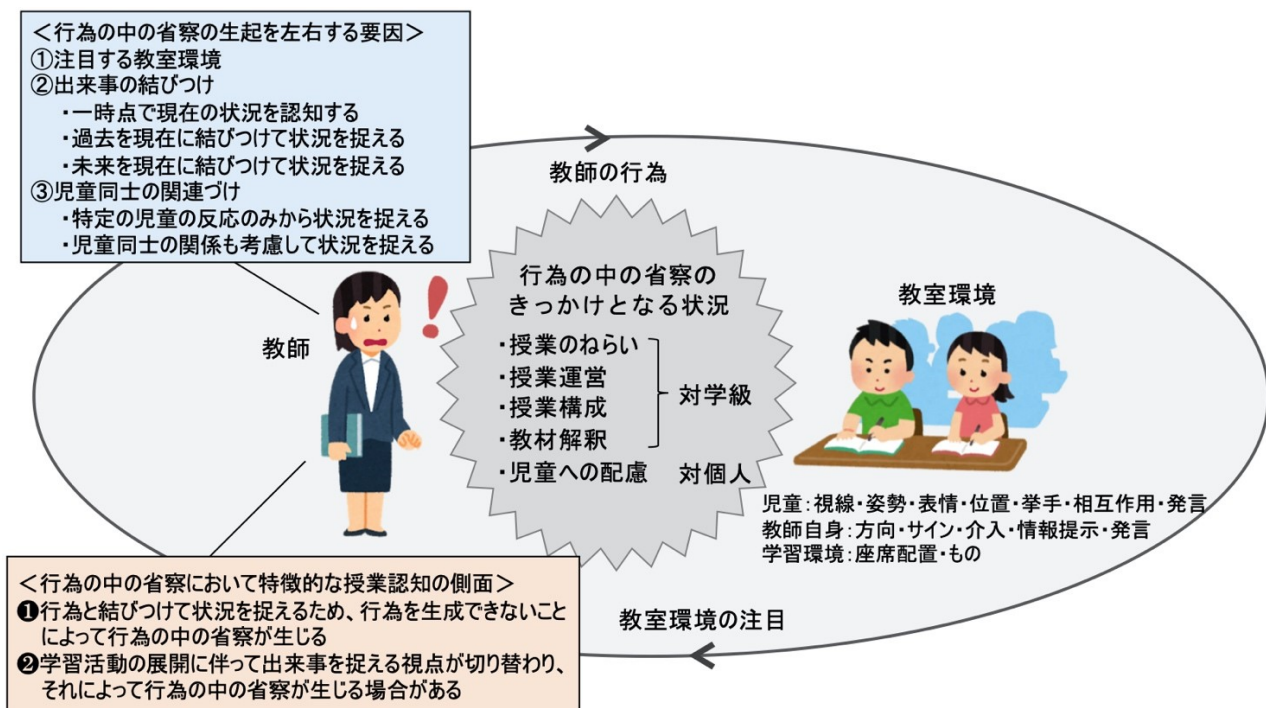


図1 行為の中の省察の生起プロセス